

## 熊士伯『等切元聲』の音韻理論について

——二十門法を中心に——

王 曹 傑

周知のように、中国の文献言語学、特に音韻学は清朝中期に最盛期を迎え、輝かしい成果をたくさん収めた。今までの研究において、戴震・段玉裁・江永など名高い学者に注目を集めていて、歴史的に著しい影響を与えた人物とその著作を対象とするのが主流だが、近年には、それほど有名ではない学者—「大家」に対して「小家」と呼ばれることが多い—に目を向け、音韻学史の全貌と実態を明らかにしようとする傾向が出現し、より全面的な研究が展開されつつある。

その中、熊士伯の『等切元聲』は当時の音韻学（特に等韻学）の実態を見る重要な資料の一つだと考えられている。本論文は、この資料の音韻理論の部分を取り上げ、特に中の二十門法について詳細に検討したものである。

第一章では、まず熊士伯の経歴と著作、『等切元聲』の内容と成立、およびそれに関する先行研究を概観した。

熊士伯（生没年不詳）、字は西牧、江西南昌人、生い立ちなどに関する史料は頗る稀少である。康熙年間に貢生となり、江西省広昌県教諭などを歴任し、北京で正黄旗教習の任についたこともある。著作は語学・文学・経学に渡って数多くあったようだが、今日に残っているのは『等切元聲』と『古音正義』のみである。古音（＝上古音）を中心とする簡略的な『古音正義』一卷と補い合せて、十巻にも及ぶ『等切元聲』は「其講明今韻之書也」、すなわち今韻（＝中古音）を講じる本である。

本書の内容は頗る幅広い。韻書・韻図（巻五～巻七）を新たに作成したほか、前代の韻書・韻図に対する校訂や評論、また、等韻学に関する様々な概念や問題についての論説もたくさんある（中に巻二と巻四は論文集とも言えよう）。さらに、梵語・ローマ字・満洲文字の資料までも研究している。

本書の成立に至る過程は、熊士伯が1703年に記した巻首の自序によると、巻三→巻二→巻四→巻八→巻十→巻三→巻五～巻七→巻一という順序である。また、1709年に巻九「閲清書字頭」の前にもう一つの自序によると、「満書十二字頭」の完成は『等切元聲』の全体が成立した後だと考えられる。

ところで、今までの先行研究は専ら本書の韻書・韻図の部分だけに注目し、単なる一つの音韻史資料として扱ってきた。最初に取り上げたのは、1940年代の趙蔭棠『等韻源流』と周祖謨「宋代汴洛語音考」であり、以降、李新魁、耿振生、應裕康、林慶勳などを経て、張美玲「『等切元聲』音系研究」（2000）が本書の韻書部分である「元聲全韻」を中心に、反切系聯法を用いた声母・韻母の再構などを行ない、さらに同音字表も作成した最も詳細な研究である。一方、本書の音韻理論についての論考が少なく、特に巻二と巻四にある熊士伯の論説は、未だにきちんと整理されていないのが現状である。

第二章では、本文の検討に先立ち、『等切元聲』の諸本について書誌学の調査を行い、テキストの状況を明らかにした。現存する『等切元聲』のテキストはそれほど多くないが、大きく康熙年間の刊本と

乾隆年間の写本という2種類に分かれる。

『四庫全書總目・經部・小學類存目』には、「等切元聲十卷（江西巡撫采進本）、國朝熊士伯撰。是編成於康熙癸未」とあり、清康熙癸未年（1703）に編成されたとされている。また、『四庫採進書目』には、本書が「江西巡撫海第三次呈送書目」の下に置かれる記録がある。残念ながら、この十卷本は『四庫全書』に編入されることなく、今日に至ってはテキストが多く残っていない。『文字音韻訓詁知見書目』と『中國古籍總目』では中国に現存する5つの版本が著録されており、中に清華大学図書館の蔵本が『四庫全書存目叢書』と『續修四庫全書』に影印され、一般的に利用できるようになっている。そのほか、趙蔭棠と永島栄一郎の旧蔵に十卷の全本が1部ずつ存在し、現在はそれぞれ台湾師範大学図書館と慶應義塾大学斯道文庫に所蔵されている。あわせて、今日確認できる『等切元聲』の刊本は全部で7つである。各目録での著録に微差があるとはいえ、版式などの分析からみると、みな康熙年間刊行・乾隆年間修補の同版だと考えられる。

刊本のほかに、中国人民大学図書館が所蔵する写本が1つ存在する。ただし、書名が変わり、『等切元聲』巻二の最初の小題を採って『韻書原始』となっている。祖本は『抱經樓藏書誌』が記録したものにたどれる。「玄」と「曆」を避けていることから、乾隆年間の書写だと考えられ、乾隆二十二年沈氏の題記に拠れば1757年以前にできたものだろう。前半は『等切元聲』の巻二の全文と巻四の一部（雙聲疊韻法、四聲五音九弄反紐圖、古音反紐説、切韻偶記）に該当するものであり、後半には『等切元聲』にない他書からの内容（三十六字母圖、等韻分九音法など）もあわせて書写されている。蓋し、この写本は『等切元聲』を含む複数の音韻資料から編集して作られた音韻学の資料集であり、『等切元聲』の音韻理論部分の節抄本と言ってもよいであろう。

本論文では、『等切元聲』の巻二と巻四における論説に対して全編の翻字・句読を行い、資料編を作成した際は、主に清華大学所蔵の刊本に準拠し、中国人民大学所蔵の写本をも適宜参照した。

本論文の本論である第三章では、熊士伯の音韻理論、特に等韻門法に関する考えを見るべく、『等切元聲』巻二にある「辨切韻二十門法」を取り上げて解説と検討を加えた。

門法とは、韻図上の排列と韻書の反切との対応関係を説明して、韻図の利用者を正しい字音に導く法則であり、等韻学において最も重要な内容の一つである。門法についての先行研究は、専ら元代の劉鑑『經史正音切韻指南』の後に附載される「門法玉鑰匙」の十三門法と、明代の真空「直指玉鑰匙門法」の二十門法を詳細に記述してきたが、残念ながら、熊士伯の門法に関する論議を取り上げて論ずるものは殆どない。

『等切元聲』「辨切韻二十門法」は、真空「直指玉鑰匙門法」の二十門法（ただし、熊士伯はこれを劉鑑のものとする）を順次に解説し、最後に総説を加えたものである。また、『等切元聲』巻一の最後に「總括玉鑰匙玄關歌訣」（以下「歌訣」と略す）が附載されており、それはもともと劉鑑『切韻指南』の十三門法の後に掲載され、牙音・舌音・唇音・齒音・喉音・半舌半齒音の順に、門法の要領を詩で表現し、句ごとに簡略な注記がついているものであったが、熊士伯が解説の注記部分を多少変えて取り入れている。

本論文では、「辨切韻二十門法」の全文を各門法ごとに、まず本文を翻字・翻訳した上、その内容を、早期の門法である『四聲等子』巻首の検例や、劉鑑『切韻指南』「門法玉鑰匙」の十三門法、並びに真空「直指玉鑰匙門法」の二十門法の記述と比較しながら、それぞれ門法の内容や、例字の比較、熊士伯

の論議などについて詳しく解説と検討を加えた。また、『等切元聲』巻二の「辨知母可省」「切母原始」「辨通廣侷狹」「辨内外」や、巻四の「切韻偶記」などで述べられた関連する論議も適宜取り上げて検討した。各門法の最後に、該当する「歌訣」の部分を熊士伯のテキストによって附記した。

二十門法の後に、熊士伯による総説が述べられている。まずは、全体的に反切が「音和」であるかどうかによって門法の性質を分類している。等の食い違いがあるのを「不和」といい、一二等と三四等の混切を「失類」という。続いて、舌音端知の混切、唇音幫非の混切、齒音精莊の混切といった広義でいう3種類の「類隔」について、とりわけ舌音と唇音の混同に対して考察を行い、古音では端組と知組が通用し、幫組と非組が通用すると論じている。

以上全体の分析からみると、熊士伯の「辨切韻二十門法」は、真空「直指玉鑰匙門法」の二十門法を基礎にして、解説をなしたものであるが、終始一貫して各門の反切用字の等を辨じ、それが「音和」か「不和」か、特に「失類」かどうか注目して考察をしていたことがわかる。また、「知母可省」「唇音原未細分」など熊士伯が提唱する音韻理論も随所に応用されていたことが明らかになった。

最後に、『等切元聲』に対する『四庫全書總目提要』の批評も取り上げた。『四庫全書』の編纂者たちは主に熊士伯の門法に着目して批判をしている。特に「内三外二門」に関して、二等が齒音にしか現れない臻撰は、「五音四等都具足」という条件を満たさないのになぜ外転というのかについて、臻撰のうち莊組だけからなる臻韻が別に立てられたからだという熊士伯の解釈に対して、『四庫全書』の編纂者は納得していないようである。また、熊士伯が提唱している「知母可省」「唇音原未細分」「孃母同泥」などの音韻理論に対して、特に『中原音韻』に現れる知照合流を以て中古韻図に適用するのは相応しくないと指摘している。確かに、熊士伯は細かな分析に長けているが、音韻史に対する通時的意識がまだ十分ではなかったと言えよう。

以上のとおり、本論文は熊士伯『等切元聲』の音韻理論を整理し、特に二十門法を中心として考察した。しかしながら、二十門法はあくまでも『等切元聲』の一部に過ぎず、熊士伯の音韻理論の全体像の解明までには、難解な術語の問題など、議論すべき事柄がなお多く残る。そして、その音韻理論が、『等切元聲』の韻書と韻図の作成や、前代の韻図に対する校訂などの過程でどのように反映されているのか、同時代・後代の文献から見て、熊士伯が音韻学史上どのように評価されるべきかなど、検討すべき様々な問題が控えている。今後の課題としたい。

## 王家衛の映画に見る香港アイデンティティ

——『欲望の翼』、『花様年華』、『2046』を中心に——

張 宇 博

本修士論文は、香港の映画監督王家衛<sup>ウォン・カーウァイ</sup>の作品において表現される香港アイデンティティについて考察したものである。1960年代の香港を舞台とする王家衛の映画は、『欲望の翼』（原題：『阿飛正伝』、1990）、『花様年華』（2000）、『2046』（2004）の三部作が中心的な研究対象である。作品で表現されている香港アイデンティティに着目し、それがどのように表現されているのかを具体的なシーンから分析を行った。さらに、1990年代の香港を舞台とする映画との比較を行った上で、各年代を描く作品において用いられる香港アイデンティティの表現方法がどのように異なっているのか、六十年代三部作におけるアイデンティティにはいかなる特徴があるのかを明らかにした上で、香港アイデンティティに関する王家衛の思考を考察した。

香港映画の歴史を辿れば、1930、40年代から上海映画の人材や資金を受け継いでいたが、中国の伝統的なイデオロギーに支配されていたため、香港は単なる制作場所と見なされてきた傾向があるだけでなく、香港で製作された映画はすべて中国大陸の生活を追憶するものであった。しかしながら、1980年代末以来、香港映画界において「懐旧電影」ブームが起きている。この分類は映画の主題を示しているだけでなく、これまで香港で制作された、以前の生活を追憶するような映画と極めて異なる特質を持っていることを示している。香港の映画研究者洛楓が指摘しているように、「懐旧電影」とは、「香港の歴史やアイデンティティを探求することによって、混乱した現状を整理し、ある程度理解できるようにする」ものである。つまり、追憶の対象であった「大陸」は姿を消し、そこで解決しようとしているのは香港と香港人の歴史問題だと言える。

このブームにおいて、1960年代の香港を題材とする「懐旧電影」が数多く制作されているが、王家衛の六十年代三部作はほかの「懐旧電影」とは異なっており、極めて特別な作品である。すなわち、香港人としてのアイデンティティの形成の経緯に注目し、それを描いているのである。しかしながら、六十年代三部作だけでなく、王家衛の作品に映し出された香港アイデンティティの問題についての研究は十分とは言えない。

王家衛の六十年代三部作、および香港アイデンティティをめぐる先行研究はそれぞれこれまでも数多くあり、本研究にさまざまな視点を提供している。その中に、王家衛の映画研究における香港アイデンティティに関する議論が行われているものもあるが、具体的に展開されていない。例えば、映画において、そのような明確なアイデンティティが表出されるのかという問題、または香港人、中国人、香港の中国人、中国の香港人といった具体的なアイデンティティ問題について、いまだに議論の余地がある。一方、香港アイデンティティそのものに関する研究は、主に政治学、社会学と歴史学を中心に行われているが、そこから香港人アイデンティティの変遷する過程と、それに伴う錯綜した心理状態を伺うのは難しいと考えられる。

以上の問題意識をもとにして構成される本修士論文の目的は、王家衛の映画に映し出された「香港人」

像、香港の都市空間に焦点を当てながら、そこで表現された香港アイデンティティとはどのようなものなのかを明らかにし、そして王家衛の香港の行く道と香港アイデンティティに関する思考を考察することである。

本修士論文の第1章第1節は香港映画界における「懐旧電影」ブームを概括したものである。「懐旧」という手段によって香港の人々が抱える共通の記憶を喚起しながら、以前の香港人としての在り方を懐かしんでいる。その中でも、1960年代の香港を舞台とした「懐旧電影」が最も多く制作されている。第2節では、「懐旧電影」には共通する懐旧要素が使用され、大きく四つの部分に分けられる。具体的には、住民の生活状況と近隣関係、社会事件といった懐旧要素を羅列することで、1960年代の香港を再構築しながら、「香港人」のルーツを構成するものを探し求めるということである。第3節では、「懐旧電影」の具体的なシーンを分析しながら、王家衛の構築した1960年代がほかの「懐旧電影」と異なる部分、及びその特徴について考察を行った。ほかの監督たちは香港人としてのルーツの探求を強調しており、香港人の存在を証明しようとしていることに対して、王家衛は香港人としてのアイデンティティの形成の経緯を描いているということである。

第2章第1節では、王家衛の経歴および彼が体験した1960年代の香港について紹介した。六十年代三部作は王家衛の個人生活環境と緊密な関係を持っており、そこに彼の子供時代の記憶が込められていることが見て取れる。また、このような経験を生かした上で、王家衛は各場所から香港に移動してきた移民たちに注目し、それらの人たちが香港に定住するまでの状況を意図的に表現しようとしていることが主な特徴である。第2節では、六十年代三部作を取り上げ、ストーリー、人物関係、時代背景から作品の内部の関連性を説明した。六十年代三部作は、1960年から1970年までの10年という時間の経過を表現しており、ストーリー、時間や人物設定が連続している。第3節では、六十年代三部作の物語の構造と具体的なシーンを取り上げながら、人物像の共通する特徴を分析した。1960年代を体験した登場人物が常に各種の原因によって受動的な立場に置かれ、居場所を探そうとしている状態が表現されている。そこに、香港のみが生きられる場所だというメッセージを内包させる。

第3章第1節では、王家衛が最も関心を持つ香港アイデンティティの形成の経緯を考察するために、作品で表現されている香港の都市像と作品の内部の変化を分析した。六十年代三部作において、「香港」が抽象的空間から、個人的関心を寄せている生活の場所への変容の過程が描かれている。それを踏まえた上で、第2節では、ストーリーの面から主人公たちが「他者」を通して帰属感を得る経緯を分析した。六十年代三部作における香港人としてのアイデンティティは、「他者」と対照されることで、はじめて意識できるものとも言える。第3節は、「暴動」の意味を考察する部分である。『花様年華』ではのめかされた潜在的な香港人としてのアイデンティティが『2046』では定着したように描かれており、両者の境目として作用を果たすのが「暴動」ではないかということについて考察した。王家衛は香港が「暴動」を通じて、生活への愛着を感じる場所から、香港人としてアイデンティティを喚起する場所に変化した歴史を、六十年代三部作に持ち込んでいるということを明らかにする。また、王家衛は香港人としてのアイデンティティの形成過程を歴史の流れで思考しながら、より丹念に捉えていると言える。

王家衛は1960年代にとどまらず、1990年代の香港を舞台とする作品も撮影している。それについて分析を加えた。第4章第1節では、1990年代の香港を描く作品では、香港の現実的な場所で撮影されているため、リアルな都市像が提示されており、場所と登場人物との一体化が強調される。最初から住民たちと香港の緊密な関係性が意図的に表現されているということである。第2節では、作品群における「他



者」が存在していないことを明らかにした上で、登場人物に自らの心の中の揺らぎが示されていることを分析した。第3節では、六十年代三部作と異なり、1990年代を舞台とする作品において、登場人物がいずれも香港の住民であることが前提されている。これらの作品では、さまざまな愛情のもつれによる不安、悩みを経験した主人公たちを描き、それを香港返還問題を目前に控えている香港住民の内面的な心境の隠喩として提示している。

最終章では、王家衛にとって香港アイデンティティとは何かについて説明を加えた。王家衛は六十年代三部作において、香港人としてのアイデンティティの形成の経緯を描いていることは、香港人の心の底でアイデンティティの問題は未だに解決されておらず、また変容し続けていくことを意識しているのではないかと推察される。また、1990年代の香港を舞台とする作品群において、王家衛が描こうとしているのは、1990年代に香港住民の心理的変容、および今後の居場所がどのように変わっていくのかといったことである。さらに、香港社会の変動によって不安を抱えている人が増えつつあるが、香港の映画監督である王家衛は比較的ポジティブな姿勢を示している。香港アイデンティティは変容していくにもかかわらず、必ずある種の希望が現れてくるという考えが映画の中から読み取れると思われる。なぜなら、六十年代三部作の一つである『花樣年華』の終盤に描かれたように、香港がいかに混乱な状態に陥ったとしても、主人公蘇麗珍が香港に残ることにしたからである。同じように1990年代の香港を舞台とする『天使の涙』(原題:『墮落天使』、1995)の終盤に二人が「家」へ向かう際、バイクが暗黒のトンネルから抜け出し、初めて夜明けの空が現れてくることも描かれている。こうして、香港人としてのアイデンティティというものは、変化しつづけていくとしても、出身地にかかわらず、香港を生活の場として考えれば、徐々に形成されるものだと言えるのではないだろうか。

以上を踏まえ、香港の映画監督王家衛の六十年代三部作を中心的な研究対象として、作品の中に表現される香港アイデンティティについて考察を行った。王家衛の映画に表現されている香港アイデンティティの実態とその変遷の経緯をより具体的に捉えることができたと思われる。また、香港人の縮図である王家衛の考えを考察した上で、香港アイデンティティという興味深い問題に、一つの文化的な視点を提供できるだろう。

## 認知学習からの中国語教授法研究

— 子どもの単語学習について —

若 林 ゆりん

外国語を学習するとき、必ず経験するのは単語学習である。しかし、単語学習は外国語学習するときのみ必要とされるのではなく、母語を獲得するときにおいても重要である。子どもは学習の天才だと一般的に言われており、特に外国語学習において、大人よりかなり早く習得できることは周知のとおりである。また、外国語、特に中国語を学ぶ時、大人は発音記号や主語、述語、目的語などの知識から習得することができるが、子どもはそのような音韻的あるいは文法的な言語の知識を持っておらず、大人と同じ方法で外国語学習することはできない。では、子どもに適している学習法はあるのか、母語獲得に似たような教授法はないのか、ということが本研究のテーマである。本論文は単語学習という側面からそれに取り組んだものである。

### 第1章 子どもの母語獲得と第二言語学習

第1章では、まずは赤ちゃんの成長がもっとも感じられる「喋る」ことから、「語彙爆発現象」を紹介した。そして、言語学習の研究でよく知られているように、母語が獲得されるのは、脳の一側化の完成する11～12歳までであるとして、この時期は「言語獲得の臨界期」に当たると想定された。この時期の子どもは大人より音に敏感で、言葉の習得もある面では大人より優れていると言われている。小学生は周りの物事に対する認知はまだ発達段階にあり、その時期に外国語を学習すればより記憶に残るだろうとも言われている。また、臨界期を迎えていない小学生に外国語の学習をさせることは、今後の外国語学習にプラスの効果が働くとも言われている。本論文はこの2つの推測を検証していきたい。

### 第2章 記憶研究から外国語学習への応用

第2章では、どのような教材が子どもに適しているかについて、心理学における記憶の研究に基づいて考察した。心理学における記憶研究から記憶に関して「スキーマ」という重要な視座を得た。そして、我々の脳内の記憶の経路について二重貯蔵モデル説をもって簡単に説明した。また、先行研究によって我々は収集した情報を脳の中でトップダウン処理をされていることが明らかにされている。学習能力が無限な可能性を持っていると言われている子どもに、自分のスキーマを利用して外国語学習をさせたらより深く記憶に残るのではないかと考えた。学習法としてはスキーマの特徴である情報のトップダウン処理を利用すれば外国語の単語はより簡単に理解できるのではないかと予想した。本研究で研究材料と使用した「もの探しゲーム」は空間的な階層に沿って語彙に関連付けて学習できるようにデザインされている中国語の単語学習ソフトである。その仕組みと特徴を記憶研究から分析し、「もの探しゲーム」の空間的な階層は普通の生活で体得したスキーマと一致していると想定した。

### 第3章 導入する教材の検証

第3章では、スキーマの特徴を持った「もの探しゲーム」の適用性を検証した。中国語の知識を全く有しない人が生活上で得たスキーマを利用して、中国語の物の単語を見つけることができれば、「もの探しゲーム」は本研究に適していると言える。2015年4月にまずは大学生を対象に2回の実験（実験1と実験2）を行った。方法として、「もの探しゲーム」から80個の物を選出して、単語リストを作成し、それを学生に配布し、10分以内で探してもらった。実験後にテストを行いその成果をみる。大学生計66人を2回に分けて（実験1と実験2）実験を行った。その結果、中国語の音韻的な知識、または文字的な知識のない学習者は、家の立体的な構造の絵を見て、自分の生活習慣から得たものに対する認知のスキーマを頼りに提示されていた物を見つけることができた。従って、本研究に「もの探しゲーム」が適していると言える。しかし、実験1と実験2の記憶テストの結果からは全体的な正解率は其々4%と6%だったため、効果のある学習法だと言えなかった。次は被験者に違う学習法で学習させ、その結果を比較し、本研究で提唱している学習法を分析していく。

### 第4章 実験材料による結果分析

第4章は異なった実験材料の学習効果を比較し、結果の分析をした。まず実験3では、認知のスキーマの特徴、情報のトップダウン処理の作業を加えて学習させた方が、より記憶に残ると想定した。実験対象となる大学生を「もの探しゲーム」を使用するグループと使用しないグループに分け、同じ単語リストを学習させ、その結果を比較、分析した。また記憶の保持を確認するため、実験日の翌日と約1ヶ月後に再生テストと同じテスト問題で確認テストを行った。「もの探しゲーム」を学習中に目標のターゲット語以外に繰り返し聞いていた上位層単語も印象に残るため、学習することができると想定した。再生テストの結果から分かったのは、①情報のトップダウン処理を加えた学習法と直接学習目標のターゲット語を提示し覚えさせる学習法の効果はほぼ同じであること、②情報のトップダウン処理を加えた学習法では、学習目標のターゲット語以外の単語も記憶することができること、そして③記憶の保持に関しては、まずターゲット語の場合は、両グループ共に翌日の保持結果は実験当日とほぼ同じである。実験3の結果、予想していたものに完全に沿うものではなかったが、トップダウン処理で単語を覚えられることが分かった。そこで、そのトップダウンの表示の形について考察した。実験4では、新しい単語を選出し、トップダウン処理の効果を比較するため、単語リストは空間的な階層順で並べた単語リストとABC順で並べた単語リストの2種類を作成した。そして、単語リストと学習法によって、三つのグループに分けた。その結果、①大学生にはトップダウン処理を加えなくても学習でき、むしろその手間を省いて、学習目標を直接提示して学習させた方が学習効果が高いこと、②「もの探しゲーム」を使用して学習したグループの方が学習した単語はより長く記憶にのこること、そして③「もの探しゲーム」を使用したグループの被験者たちは成績でばらつきがなく、みな同じような学習効果を得られることが分かった。

### 第5章 小学生対象の教授法実験

論文の第5章は、実験3と実験4の結果を踏まえて、小学生を対象に実験を行った。小学生も大学生と同じように生活上で得たスキーマを利用して、トップダウン処理の階層に沿ってデザインされた学習



ソフト「もの探しゲーム」を使用して、指定された中国語のものを見つけることができるのか。それと、仮に小学生はその中国語を記憶することはできたとして、その記憶をどれほど長く保持できるかを検証した。方法は大学生実験と同じように、実験材料「もの探しゲーム」と単語リストを使用し、その後再生テストと確認テストを用いて、学習効果と記憶の保持状況について分析した。また、記憶の保持の変化をより詳しく確認したいため、確認テストは実験日の翌日、約2週間後と約1ヶ月後の計三回を設けた。その結果、①小学生でも普段の生活で得た認知的な知識を頼りに、「もの探しゲーム」を使ってもものを見つけることができること、②トップダウン処理の学習法によって単語を記憶に残ったが、ターゲット語の学習効果はとて良いとは言えず、その一方、トップダウン処理によって、繰り返し聞いていた上位層単語は記憶に残りやすかったこと、そして③小学生が記憶した単語の記憶保持はとて良い傾向が見られることが明らかになった。実験5では、今までの実験で見られなかった結果が見られた。今までの実験では実験日から時間が経つと共に学習した単語の記憶が段々と薄れていくのに対し、小学生はその反対に、学習した単語だけではなく、実験日に正解できなかった問題も後から正解できた。実験中の小学生の様子から、その原因の一つとして考えられるのは、小学生は新しい情報に対する興味やモチベーションは大学生より遥かに高いということであった。そこで、もう一度小学生を集めて、同じ実験を行って、また今回と同じような結果になるかどうかについて検証したいと考え、実験6を行った。実験6に協力してくれた小学生は実験5と同じメンバーであったため、「もの探しゲーム」から最下位層の単語は20個新しく選出し、再生テストの問題も新しく設定した。実験5と同様に、実験日から翌日、約2週間後、そして1ヶ月後に計三回の確認テストを行った。その結果から、今まで想定したことのひとつが検証できた。①中国語の音韻的、文字的な知識を有していなくても、生活で得たものに対するスキーマとイラストの刺激によって、ものを見つけること、すなわち、ものを認識することができる。②トップダウン処理を加えた学習法で学習させると、ターゲット語の中国語単語の意味と音声を記憶することができる。そのうえ、トップダウン処理の効果でターゲット語以外の学習もできる。③トップダウン処理を加えた学習法で学習した単語の記憶は時間が経っても保持され、安定している。④子どもは新しい情報に興味があり、大学生よりモチベーションが高いため、学習にプラスの効果をもたらす。

## 第6章 実験のまとめと今後の課題

終章では六つの実験をまとめた。本研究は小学生をメインの対象として考え、中国語の単語学習方法について研究してきたが、実験の中で大学生に適したものもあったので、今後は研究対象をもっと広げ、学習材料をもっと違う面から集め、一人一人に合った教授法を模索していきたい。また、子どもの特徴を利用して、外国語学習における単語以外の音韻、文法などの教授法も模索していきたい。